

Title	「古代ビルマ概観」
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 12 p.95-p.113
Issue Date	1962-12-15
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80209">https://hdl.handle.net/11094/80209</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「古代ビルマ概観」

服 部 正 一

နိဒါန်း

န မေ ဘတယ ဘ ဂ ဝ တေ ဘအ ဂဟ တေ ဘသ မ္ဗ ဘသ မ္ဗု ဒ္ဓယ

ကျွန်ုပ်တို့သည် ၊ ရှေး ခေတ်မြန်မာ ၊ အမည်ရှိ သော ဤအကြောင်း အရာ ဝ ဘကို ရေး သား ပြုစု လေ့သတည်း ။

ဤစာစောင်ငယ်ကား ယခုမြန်မာနိုင်ငံတွင်ရှိနေကြသော တိုင်း ဂင်း သား များ ဝ င် ရောက် နေ လေသည်မှစ၍ အနောက်ရထား မင်း စေလက်ထက် တိုင် အောင်အထိ မင်း တို့အမှု နှင့် ငင်း ၊ တိုင်း ပြည်အမှု နှင့် ငင်း ၊ သာသနာ တော် ရေး နှင့် ငင်း ရှေး အခါကတည်း နှင့် တဦး မည်သို့ ဆက်ဆံခဲ့ကြသည် ၊ မည် မှုကြီး ပွား သည် ၊ ဆုတ်ယုတ်သည် ၊ အဘယ်ကြောင့် ငြိမ်းသို့ ၊ ဖြစ်ရသည် စသော အကြောင်း အချက်တို့ကို စုံစမ်း ရှိအတို ကောက် ရေး သား ခဲ့ လေသတည်း ။

古代ビルマについて書かれた書物は多少あるが確実なる記録は A. D. 5 世紀以前にさかのぼり得るものは皆無であり、5 世紀より 10 世紀までの間について書かれたものでさえ、ほとんどが荒唐無稽な伝説に等しいものに過ぎず、科学的な裏付けになる書き物は僅かである。A. D. 1057 アノーヤター王のタトン攻略後、始めてビルマ史に関する記録が確実になってくるのである。

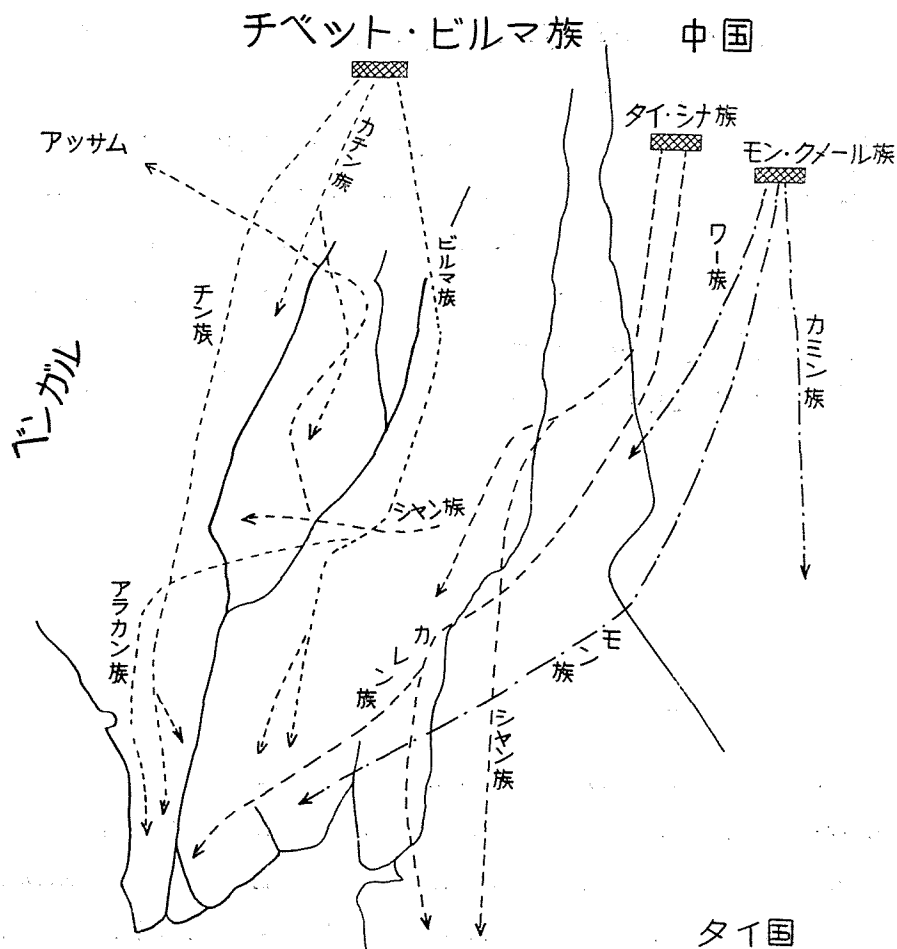
## ビルマの諸民族

ビルマには現在大別しても 101 を数える多数の民族が住んでいるが、さらにそれらを代表するものをあげれば、Burman, Shan, Mon (または Talaing) Karen, Chin, Kachin 等である。これらの民族はビルマの遙か北方の地域から移動してきたものである。彼らは古代、中央アジアの

高原から降つてきたと思われるチベット中国系の人種、即ち、広い意味で一般にモンゴル人種と呼ばれているものたちである。チベット東部、および中国の南西域の高地一帯からビルマ側へ三大民族の移動が行われた。それらは、

- (1) モン・クメール族 (Mon-Khmer)
- (2) チベット・ビルマ族 (Tibet-Burman)
- (3) タイ・シナ族 (Thai-Chinese または Shan-Chinese)

である。彼らの移動状態を略図で示せば次の通りである。但し、これらの民族がビルマ本土へ到着した順序は不規則であり、重なり合っている。



上に示した民族移動画図は U Hpo Kya 氏 (P.3) と U Min Han 氏 (P.6) のビルマ史の略図を折衷して作ったのであるが、U Hpo Kya 氏の図に少し足りない所を U Min Han 氏のものから補足したが、U Min Han 氏の図には少し考え違いがあるまいかと思う。例えば、U Min

Han 氏はカチン族の出所をタイ・シナ族のシヤン族の分れとなし、それに Kachin Shan という名称をあたえている。また U Hpo Kya 氏のチン族のところが U Min Han 氏のではアラカン族となっていて、チン族（テツ族と一致する）はシヤン族の分れとされている。また U Min Han : Myanma-Naing-ngan-daw Hket-laik-Yāzawin, P. 7 の分類の項においてもチン族とカチン族がシヤン系に結びつけられている。

(1) モンクメール族は最も古いと思われる。彼らは B C 5 世紀頃から移動を始め、下ビルマに定住するに及んでモンと称した。今日ではタライン族 (Talaing) とも呼ばれる。

しかしながらモン族とタライン族の起源は同じではない。タライン族はマドラス海岸に沿ったテリンガナ (Telengana) 地方から下ビルマ海岸地帯、即ち、モン族の住む地域へ西暦 1 世紀頃からやって来て住みつくようになったインド系の民族である。故にその故郷であるテリンガナに因んで彼らをタラインと呼んだのであるが、その後モン族とタライン族の混血児をもタラインと呼ぶようになり、更に純粹のモン族もタライン族と呼ぶようになった。しかし純粹のモン族は自らがタラインと呼ばれるのを好まない。

モン族の起源について、\*今日調査された所では、インド中部、東部、ベンガル、アッサムの一地方にはモン族と類似した Kol, Mungdha 等の民族を見かける。太古、モンゴル人種の一部がブラマプトラ河沿いにその地方へ来て、インドの東北部に住みつくようになったのであるから、ビルマ国内のモン族とインド側のムンダー等の民族との間に何らかの関連性があるものと思われる。ある古いモン族の歌の三節には次のように唱われている。

ビルマ語訳にて (U Hpo Kya : Myanma Yāzawin Akyin:, P. 6)

“Eindiya ashe bet kan:,  
Go hdawadi myit wa,  
Gingā myit wa ani:  
A hti shi thaw kan:nā:,  
Ayat detha do hma,  
Mon lūmyō: do htwet hkwā ge ywe,  
Auk Myanma naing-ngan  
Dagon, Thahton, Zayā: nè  
Bilū: kywun: ayat detha do tho  
Lā yauk ne htaing kya gyaung:”

---

\* C. C. Lewis : The Tribes of Burma, P. 13.

W. W. Hunter : A Brief History of the Indian Peoples, P. 49

「インド東部海岸、  
ゴダワディ河口から  
ガンジス河口附近に  
到る海岸地帯より  
モン族が出発して、  
下ビルマの  
ダゴン、タトン、ザヤー地方（現在のムドン）  
ビルー島（鬼が島）等の諸地方へ  
やって来た。云々……」

(2) チベットビルマ族は西暦紀元初期にビルマへ侵入してきた。彼らにはビルマ族、チン族、カチン族等が含まれる。特にビルマ族はビルマ中部全域に拡がり最も強大で、よく知られた民族である。アラカン族はビルマ族から分岐した一群であって、ビルマ族に属する。

当時ピュー（Pyu）、カンヤン（Kanran 又は Kanyan）、テツ（Thet）と大ざっぱに呼ばれていたが、ピュー族は今日ビルマ人と呼ばれる人種と混血し、13世紀以後は全く姿を消して了っている。カンヤン族はアラカン族にまたテツ族はチン族になってしまっている。

(3) タイ・シナ族

シャン、ヨドヤー（タイ）、ロー等の民族から発生してきた民族は Htaing と呼ばれている。彼らはビルマの北西、北、東北、東、東南地域一帯に散在して行った。アッサムとタイ国はシャン族の国である。これらの民族はビルマ族とは時期的にはほとんど同じか、またはより早く移動し来たりて、ビルマの国境地帯に住みついたものらしい。六世紀頃からビルマ国内へ続々入り込んで来た。シャン族は12世紀には著じるしく勢力をもち、今日シャン高原として知られている地域に入り込んだ。本質的に分裂繁殖の性質を有し、一時は非仏教的山間文化の花を咲かせた。13、14世紀になると、特に強大となり、上ビルマを支配するようになった。

カレン族（Karen）はこのタイ・シナ系統に属す。

#### タガウン時代（Tagaung : Hket）

ビルマ史は通例タガウン時代から書き初められている。チベット・ビルマ系諸民族がビルマに入り込んで来た頃、即ち今より2000年前頃には、上ビルマのタガウンや西部アラカン地方、中部プローム一帯に人家が結集していたが、いまだ繁栄していた訳ではなかった。これらの三つの地域で 彼らの指導者（酋長）に従って生活していた当時、文化面においてより優れていた中部インドから多数の人々がビルマに入り込み、政治、宗教、文学等をもたらした。このようにビルマ

に入り来る場合、一般にアッサム、マニプール、アラカン等の諸地方を通して陸路によって徐々に入り込んだ。

当時住民の大部分は文字を知らず、Nat（精霊）崇拝者たちであり、また何らの政治組織をもたなかった。彼らは森林や山々を距てて互いに離ればなれになった部落に生活を営み、道路もなかった。王権が存在するようになって、各王国は現在の町ほどの大きさもあり得なかった。

一方、ビルマの南部にはモン族が住んでいたが彼らの所へもインド南部からベンガル湾を横断して渡緬した人々によって宗教、文学、農業、技芸、等の文化が紹介され、プローム一帯に伝えられて行った。現在の肥沃なデルタ地帯は当時海中にあった。タトンは海岸にあり、ペグーは浅瀬にある一つの島にすぎず、プロームは海に近い港であった。

大ていのビルマ史によれば、インド中部よりシャカ族の王アビヤーザ（Abhiyāza）が手兵を引きつれてビルマに來りて、タガウンを支配した。彼の二子、カンヤザーデー（Kan-yāza-gyi:）とカンヤザーンゲ（Kan-yāza-nge）はアビヤーザの死後、王位継承について互いに論争し、先に寺院を建てた者が勝ちということに落着した。弟のカンヤザーンゲは詭計によって一夜の内に簡単な材料で寺を建て、勝名乗をあげて、父の王位を継いだ。従って彼は引続きタガウンを統治したが、兄のカンヤザーデーはアラカン地方へ移って行った。カンヤザーデーの子ムドウシッタ（Mudusitta）はピユー、カンヤン、テツ諸族の居住地であるプロームを治めた、こと等が記されている。そしてアビヤーザがビルマに移住してきたのはシャカ・ゴータマが出現する以前のことだと云われている。釈迦出現後、更にダザヤーザ（Daza yāza）という名のシャカ族の王が來緬し、タガウンを支配した。このようにアビヤーザ以後50代続き、タドーマハーヤーザ（Thadō mahā yāza）の時代に北部及び東北部より中国系シャン族や韃靼族等が侵入蹂躪したため、タガウン王国は崩壊したのである。

#### タレケッタラ時代（Tharehkettarā Hket）

タガウンが亡びて後、タガウン王朝最後のタドー・マハーヤーザ王の二人の子マハー・タムバワ（MahāThambwa）とスラ・タムバワ（Sula Thambwa）は現在のプローム一帯を支配した。その後マハー・タムバワとベダーリー（Bedāri）王妃の間に生れたドッタバウン（Dotta baung）王がタレケッタラ王国を建設し、統治した。

U Min Han のビルマ史によればマハータムバワとスラ・タムバワは盲目の王子として生れた。当時の慣習によれば王子が統治に不適任なる場合はこの世から葬むられることになっていたが、母の王妃は二人が青年に達するまで秘かに彼らを匿い、後にイワラデイ河を筏に乗せてのがれさせた。現在サガインと呼ばれている所へたどり着いた時、そこに住んでいたサンダムキーと称

する女鬼を改心させ、その返礼としてその女鬼により二人は奇跡的に目が見えるようにして貰ったと云われている。現在ユワリン(ywa lin:「光の村」の意)と呼ばれている所があるが ya lin:「光を得る」の訛りであって二人の視力を得た所であると云われている。

ピュー族は中部地方一帯に住んでいたが、西暦紀元初期には、プロームにおいて最も勢力があった。実にタレケツタラ時代はピュー時代と云ってもよいほどである。

ピュー、即ち Pyu は古くは Pru と発音されていたが、ハンリン・タミン(由来記)によれば、Pru は Prun(「ほほえむ」の意)より出で、ピュー族全盛期には“Shwe mō: ngwe mō: ywa di”「金銀の雨が降る」と云ってほほえみ笑つたということから民族名となったそうである。Promé は英語で呼ぶ地名であるが、Prun を訛ったものとされている。ビルマ語では現在 Pyi myo と呼んでいる。

ピュー族がチベット・ビルマ系民族に属することはすでに述べた。彼らはビルマ暦 600 年から 700 年(西暦13世紀)に至るまではいまだ完全には消滅しておらず、彼らの言葉を文字に書き表わしていた。その後次第に姿を消し、今日ビルマ人と呼ばれる民族の中に混入吸収され、消滅していった。

ピュー族が栄えていた頃即ち西暦 1 世紀内至 2 世紀頃に、インドの南部地方からインド人が東の方へ移住し、下ビルマの海岸地帯、即ちダゴン、ペグー、タトン、プローム等に定住するようになった。タレケツタラ地方でも勢力をもち、居住地を建設したものと思われる。彼らの思想や学問がタレケツタラにおいて西暦 300 年頃に広がっていた。この頃にはインド南部で使われていたカダンバ(Kadamba) 文字をタレケツタラ地方でピュー語を書き表わすのに用いていたことが判明している。

紀元(暦)の書き表わし方もインドから採り入れた。最初に仏暦が使用されたのはタレケツタラ時代である。仏暦は釈迦仏陀入滅の時から数え始める。仏暦元年は西暦紀元前 544 年に相当する。この仏暦紀元 624 年(A. D. 80年)にプローム——タレケツタラ王朝の第25代目のトウムダリー(Thumundari) 王は占星術上に兆か現われたという理由で622年に修正した。修正後、2年目を以て年号を数えた。この修正した紀元をタレケツタラ暦と称する。その後更にパガン時代にも修正が行なわれ、この第二回目の修正を現行のパガン暦と呼ぶ。従って仏暦、タレケツタラ暦、パガン暦(現今のもの)の三通りが用いられていた。(パガン暦については後述する)

民衆の土着信仰である Nat(精霊)や竜神崇拜の中ヘインドから、バラモンの思想が入ってくるようになった。後に仏教が伝わり、拡つた。仏教が普及したといっても、在来の土着信仰やバラモンの思想が全く衰滅した訳ではなく、多少は残存していた。この時代に建造されたボーボーヂ(Baw-baw-gyi)パゴダの様式は非常に古く、他のパゴダの様式とは異っている。

西暦8世紀頃に、インドの王族、またはインド系の名称をもつ王が統治していたということが骨壺に記された刻文によって明らかにされている\*。“Wikrama”及び“Tadahbā(:)”という言葉が記されていたところから「ウイクラマ王朝」が存在していたことが解る。

“Tadahbā”はピュー語で「秀れた王」という意味である。またタレケツタラ王国の創設者であるドツタバウン王は一人の王の名前ではなくて、複数の王の名前であったものらしい。

現行のビルマ暦116年(A. D. 754年)には、中国系シヤン族の国であった南詔(雲南)はビルマの北部一帯に勢力を延ばしており、それより約百年間はその王が自らを **Pyu Shin** 即ちピュー王であると称し、北部一帯を従わせた。タレケツタラもその支配下にあったらしい。

タレケツタラ王朝最後の王である第27代目の **Thupinyā Nagaraseinna** トウピニヤ・ナガラセイナ王はカンヤン国(アラカン)の叛乱を鎮圧した後、その国にあった高さ28キュービットの金造りの仏像に心を惹かれ、それを得たい一心から3年間もその国を去ることができなかった。大臣や部下たちは王の命令に背き、狡猾な手段を以てその仏像の金を取去り、模造の仏像を鑄造して王に献上した。王は部下たちと共にタレケツタラへ帰って行った。このように私用すべきでない仏像の金を取去ったことから人々の心に我欲が起り、世間には泥棒、強盗、匪賊がはびこり、国内は不安定となり、動揺が起つた。

カンヤン国にあっても、人々が敬っていた仏像が破壊されたので我慢できず、遂にタレケツタラに対して叛旗をひるがえした。

一方、南部の東方一帯に勢力を有していたモン族もこの機に乗じて領土の拡大を図って、上部タレケツタラ国へと北上侵入した。

タレケツタラ国の治安が乱れて、國中騒然となっている時、一人の百姓女が彼女の箕(み)が風で吹き飛ばされたのを“**Nga sakaw, nga sakaw**”「妾の箕、妾の箕」と叫んでそれを追かけた。彼女の叫び声を聞いた人々は **Ngaskaw** の軍が押し寄せてきたと早合点し、上を下への混乱の中に人々は逃亡分散してしまった。このように内敵外敵が起り、國中不安と動揺に襲われ、滅亡に瀕していた時にこの“**Ngaskaw** 吹き飛ばし”が発生し、導火線となったものと考えられる。

このようにしてタレケツタラ国が滅亡したのは **U Hpo Kya** 氏のビルマ史によれば、仏暦紀元638年、タレケツタラ暦では16年(A. D. 94年)だとされているが、**U On Maung** 氏の新ビルマ史(1953年出版)ではA. D. 51年となっているが、これは年代の計算違いであろうと思われる。また同氏(**U On Maung**)はタレケツタラ王朝が約500年間続いたと記しているが、そんな

---

\* W. W. Hunter: Brief History of the Indian Peoples, P. 91



筈はない。U Hpo Kya 氏の説に従って A. D. 94年に滅びたのが正しいとしても、タレケッタラの住民は現在のパガン暦 200 年内至 300 年 (A. D. 9 世紀) 頃に至るまで町や村に残つて生活していた、ことが察せられる。

プローム、即ちタレケッタラの王マハー・タムバワから数えて第27代の Thupinyā Nagarahseinna 王の時代に、タレケッタラが亡んだ時分散した人々は再び集結して、彼らピュー族の住む処を求めて今のパガン地方へと移り “Ye kyi yā, myet nu” (水清き所、草やわらか) き所に町や村を建設し、パガン時代を築き上げる基礎を固めた。

## パガン時代 (Pagan Hket)

### パガンの建国

タレケッタラが滅亡した後、末代の Thupinyā Nagarahseinna 王の甥であるタムダリツ (Thamudarit) は分散した人々を結集し、タレケッタラからタウンニヨ、テッター、パダウン、ミンドンへと次々に移動して行つて、約12年の年月が過ぎた。その後彼らの同朋たちが住んでいる所、即ち、現在のパガンの地へと移つて集落を造った。

タムダリツが最初に建てた町の所在地はイラワヂ河 (Irrawaddy または Eyāwadi Myit) の東岸七哩程のところにあるヨンフロツチュン (Yon-hlot-kywun:) であった。この Yon-hlot-kywun: の kywun: は現代ビルマ語の「島」の意味ではなくて、「森林」を意味する古い語である。その建国年代は仏暦651年、タレケッタラ暦29年 (A. D. 107年) だと云われている。

それ以後、最初の場所とイラワヂ河との間七哩程の地一帯に町の位置が四回移り変った。最後の四回目のパガンへは、第34代ピンビヤー (Pyinbyā) 王の時代にパガン暦211年 (A. D. 849年) に遷都した。現在パガンと呼んでいる地はこの第四回目のパガンである。

最初のパガンをタムダリツ王が建設した頃は町は広大なものでなく、19ヶ村をまとめて町にしたものであった。それ故、パガンは Pyūgāma 「ピュー族の村」の意味より来ている、即ち Pyūgāma > Pugāma > Pagan > Pāgan となった訳である。山や森林に取囲まれていて、そこに住む野獣や怪鳥の害を受け人々は大いに悩まされていた。また野生のひょうたんの樹や蔓が生い茂ってそれらを取除くに困難であった。

その頃ピュー・ソー・ティー・Pyūsawhti: という青年が現れて害獣を退治し、ジャングルを切開いて人々の便宜を図った。その場所に記念のパコダが建てられ今日に至るも残っている。タムダリツ王は国のために尽したピュー・ソー・ティーを自分の娘(王女)と結婚させ、王位継承者 (Ein-she-min:) に任じた。タムダリツ王が没した時ピュー・ソー・ティーは王位に就かず彼の師であり、恩人であった一人の隠者を還俗せしめて王とした。そのヤチー・チャウン王 Yathe

Kyaung は15年間国を治めた後この世を去った。Yathe Kyaung の Yathe は「仙人」の意であり、Kyaung は *wot kyaung* 即ち「色とりどりの衣服」の意であって僧侶が俗人の着物を指して言う場合に用いられる、この場合、僧侶や禁欲行者が還俗したことを意味する。

その後ピュー・ソー・ティーが王位に即いた。彼の時代になって、ピュー族と中国系シャン族が接触するようになり、従ってシャン族の習俗がピュー族の間に伝わっていった。

ピュー・ソー・ティーという名前には、Pyū＝「ピュー族」＋Saw＝（シャン語で）「王，王子，支配者」＋Hti:（中国語で「帝」とそれぞれの意味をなしているのであるから、その名称はピュー語とシャン語と中国語との混合で、ピュー族を支配する王ということである。そればかりでなく、ピュー・ソー・ティー以後、六代の王の命名法は南詔，即ち、シャン・中国系の国家における命名法と似ている。類似点というのは父の名前の最後の音が子の名前の最初の音になることである。例えば、

Pyū-saw-hti:→Hti:-min-yin→Yin-min-paik→Paik-thin-le

という如くである。このように命名した時代は雲南（南詔）では、パガン暦11年から264年(A. D. 649～902年)までの間でピュー・ソー・ティーたちの時代は、大ていのビルマ史によれば、ビルマ暦89年から334年 (A. D. 167～412年)まで位の間である。従って両者の間には、500年程の差がある。

シャン族や中国人の風習の外に、インドから種々な風俗，文学，宗教，等が続々と伝来し、拡まっていった。王宮の建築法，称号の附与法，即位式洗礼式（バラモンによって行われる就任式で、頭の上に水をそそぐ，ビルマ語で *Bhitheit-pwe* という）等はインドから伝わった風習である。また仏教も大いに盛んになった。Pyū-saw-hti: の建てたグーパゴダ (*Gū-hpayā:*) 15塔は現在も残っている。ブーパゴダ (*Bū:hpayā:*) はその中の一塔である。

上述のようにパガン国はインドの中部地方，中国系シャン国，タレケッタラ（王朝滅亡後の）等と往き交して、それら大国の風俗習慣や学問等を適当に採り入れていた。

マハーギリ・ナツ・マウンナマ (*MahāGiri-Nat-Maung-hnama*) に関して。

タムダリッ，ヤテ・チャウン，ピュー・ソー・ティー等が次々とパガン国を統治して第七代のティンレチャウン王の時代に到ってビルマ暦 266～319 年 (A. D. 344～387 年) の頃にマハーギリ・ナツ兄妹のナツ信仰が入り来たって土着のナツ信仰（ビルマ語で *Nat-Kō:kwe gyin:* といって *Shamanism* の一種）が一層盛んになった。

王朝史，即ち，ヤーザウイン (*Yāzawin*) と共にビルマ史研究の資料たるものに，タマイン (*Thamaing*) と称する由来記があるが，そのタマインに述べられたマハーギリ・ナツ・マウン

ナマに関する記事の大略は次の通りである。

上タガウンに住む鍛冶屋の青年マウン・ティンデが体力優れて強堅であることを、その国の王が恐れて彼を逮捕しようとしたがジャングルの奥深く逃げられてしまったので、王は一計をめぐらして、マウン・ティンデの妹ソメヤーを王妃にした上で、マウン・ティンデを太守に任命するから、と王妃を説き伏せて、彼を呼び寄せさせた上、家来に捕えさせてサガー樹に縛りつけ韃（王や僧侶を火葬する時に使った道具）を使ってマウン・ティンデを焼き殺してしまった。王妃は悲しみの余り、その焰の中に身を投じて死んだ。そして二人はナツ兄妹になったそうである。彼らナツ兄妹はそのサガー樹に住みつき、側を通る人々に取りついたので王は部下にサガー樹を掘り起こさせ、イラワヂ河に流した。その樹はパガンに辿り着き、ティンレ・チャウン王が拾い上げてその材木でナツ兄妹の像を彫らせ、ポッパ山（Poppa Taung）にナツ社を建てて、そこに奉納した。

それ以来毎年 Nat-daw-la（ビルマ暦の9月、日本では大たい12月に当る）になると、王を初め王子、王孫、貴族、大臣、国民、誰も彼も、その山へ登り、盛大なナツ祭りを催し、供物をするようになった。供物として水牛、牛、豚、鶏等を殺し、供え終った後、それらの頭を各自の家の前のナツ柱に引掛けておいた。このようにして、ビルマの国中にナツ崇拜が盛んになって行った。

ナツ兄妹が住むというポツパ山を詠んだ詩の一節を次にあげる。（U Pe Mg Tin : Myanma Sāpe Thamaing, P. 11）

Poppā: Nat Taung

Ahkaung myin hpyā:

Son taw pyā: hnaik

Nan shā: kyaing lwin

Hkā dan pwin di

Shwe hnin yō: hmā:

Pan: sagā:

（そびえ立つ

ポッパ聖山

頂あくまで高く

鳥花に満ちた森に

芳香ただゆ

季に応じて開く花

黄金と見ごうばかりの

きんこうぼく。)

古い時代に書かれたこの詩ではまず 2 行目と 3 行目において、

Ahkaung myin [hpyā:]

Son taw [pyā:] hnaik

となっているが初めの行の最後の語の後に she-ga-pauk (小さい: の声調 即ち heavy tone) があり、次の行では終より二番目に she-ga-pauk のついた語がきていて韻をふんでいる、のと 4 行目より 6 行目にかけて、

Nan shā: kyaing [lwin]

Hka dan [pwin] di

Shwe [hnin] yō: hmā:

[ ] の語が互いに韻をふんでいる。即ち最初の行の最後の語に Auk-ka-myit (語の下にうってある小さい。 の声調, 即ち creaky tone) があり、次の行では終りより二番目の語にそれがあり、最後の行では終りより三番目にそれがきている。そしてこの詩の最後の行の Pan: sagā: を除いてすべて 4 音綴で一行をなしている。現在でもこの形式を取っている詩は可成り多い。

#### 仏典の伝来

さてティンレチャウン王の時に、即ち西暦 5 世紀の初め頃に至って、下ビルマに住むモン族の所へ仏教経典が伝来した様子である。5 世紀頃にマドラス海岸にあるキンシプールという町においてダンマパーラ僧正を中心に仏教が盛んに行われていたが、当時ビルマ南部と往き来していた関係上、下ビルマにも仏教の地盤が固められた。またモン語の文字は西暦 5 世紀にマドラス海岸一帯で使用されていたパラワ文字の系統であることが判明している。(Myanma Naing-ngan-shi-Aikhhayā Thamaing: 参照)

#### ビルマ紀元の再修正

第20代ポッパ・ソー・ヤハン王 (Poppā: -Saw-Yahan: Min:) の時代に再び紀元の修正が行われた。Thumundari 王が仏暦624年 (A. D. 80年) に622年を切り捨てて 修正年 2 年目を以て、タレケッタラ暦という名称をあたえて、数えることにしたがパガンでは 562年 (A. D. 640年) にポッパ・ソー・ヤハン王が 560 年を切り捨てて、差額 2 年を起点にパガン暦という名称で数えることにした。今日ビルマにて使用されているのはこの紀元である。したがって、現在彼らがビルマ暦と呼んでいるものはこのパガン暦のことである。今日では西暦紀元をも使っているから、仏暦、タレケッタラ暦、パガン暦、西暦等多くの紀元がある訳である。これらの紀元を次の方法によって計算すればより便利である。

- (1) 仏暦はタレケッタラ暦よりも622年大きい。
- (2) タレケッタラ暦はパガン暦（現在の紀元暦）よりも560年大きい。
- (3) 仏暦はパガン暦よりも1182年大きい。
- (4) 仏暦は西暦よりも544年大きい。
- (5) 西暦はパガン暦よりも638年大きい（ただし1月1日より4月15日（ビルマの正月）までの間であれば）639年大きい。

#### 第4次パガンの建設

タムダリツ、ピュー・ソー・ティー等の時代以来主都を3回移し変えて、森林を切り開き、開拓してきた。第34代ピンビヤ王の時、即ちビルマ暦211年（A. D. 849年）に第4回目のパガン、即ち現在のパガンの地に城壁を囲らし、小塔を設け、町並を整えて、大いに繁栄してきた。行政面では町の4ヶ所に長官を任じて法律、裁判等を司らせ、産業貿易面では、タレケッタラ、アッサム、中国、シヤン等と交易が盛んになってきた。このように最後の第4次パガンがビルマ発展の基礎となった。

当時は王位の変遷が頻繁であり、王政の時代ではあったけれども、大臣や従臣たちが策略を用い、彼らの意のままになっていたことは下記の事情によって知ることができる。

第27代テインコン王（Thein: hkon Min:）は一人の弟をもっていたが、弟は兄のテインコン王と戦って敗れ、逃れてサレーという所に身を隠して暮した。彼の孫にあたるンガコエ（Nga-hkwe）は両親が生活に困っていたので、ある金持の所に奉公に出されて、召使いとして働いていた。ある時、この金持の主人がパガンへ舟で出かけるのにお供をして行った。パガンへ着く前の夜にンガコエは自分の臍から腸がとび出してパガンを取り巻いたという夢を見た。朝になって、河を逆登って舟を進めたところ、竹竿に黄金の皿がひっかかってきた。ンガコエは「わしが見た夢は良い事が起る前兆だ。そしてこの黄金の皿は自分にはもったいな過ぎる」と云って河の中へふるい落した。パガンに着いてから、ある姿羅門にこの夢を占ってもらったところ、ンガコエがパガンの王になるであろうと云った。その後ンガコエはサレーに帰ったが、その金持に虐待されるのでパガンへ逃げてきて第35代のタンネツ（Tan-net）王に任えたが、王の気に入りに、調馬師に任用された。王は毎日一人の側女を連れて馬小屋へ馬を見に来るのが慣わしとなっていた。そうこうする内にンガコエは側女と親しくなり、ある機会に、側女と共に計り、王が馬小屋へ来た時、彼を殺害して王位を奪った。第36代サレー・ンガコエ王と称した。

ンガコエは王になって短気な気性を表わした。以前自分を虐待したことのある例の金持を呼び寄せて殺し、なおこの金持と同じように自分を虐めたことのある人たちを捕えて来させ、池に投げ込み、「豚」と罵って、象の上から槍で彼らを突き殺した。ということである。このような行

為が目にあまるので従臣たちは王を憎むようになり、象使いの頭（かしら）に言い含めて、王が象の背に乗って水遊びをしている 際中に 象の鞍の 腹帯を切らせた。すると鞍杵が外れて王は墜落した。そこえ従臣たちが手に一握りづゝ泥を一斉に投げつけたので王は遂に死んでしまった。

この池を「一握りの泥池」Nyon-ta-let-hpet-kan と今日でも呼んでいる。

サレー・ンガコエの子である第37代ティン・コ王（Thein: hko Min:）は馬に乗って森へ遊びに出かけたところ、空腹を感じたので胡瓜をもぎ取って食べた。畑の主はそれが王であることを知らず、許しを得ずに胡瓜を食べたことを憤って鋤の柄で王を打ち殺してしまった。その時、王の調馬師がやって来て、その有様を見ると、

調馬師「村長、なぜ我々の王を叩き殺したんだ。」

村 長「俺の胡瓜を許しも乞わずに食ったからだ。これが叩き殺さずにおられようか」

調馬師「これ、百姓、王を殺害した者はその者が王にならねばならないことになっているのだ。」（国情を慮って計略にかけて、そう言ったように察せられる。）

村 長「俺の畑の胡瓜は、小犬が乳を飲んだように、よく実のつている。胡瓜を捨ててまで王になりたくない。」

調馬師「村長よ、お前の胡瓜畑は今まで通りに所有できるようにさせようし、王位にも即かせよう。また、たくさんの金銀財宝も手に入ろう。」と

調馬師は強引に口説いたので村長はついに引受けて王宮へついて行った。調馬師は人々に気付かれないように密かに彼を宮殿へ入れて、王妃に全てを話した。王妃は国内を動揺させないように計った調馬師を賞讃した。そして衣服の着こなし、振舞動作など王としてのあり方を村長に教え込んだ。ところが、やがて宮廷内のある王妾の一人と大臣が彼らの君主でないことを見破って、粗暴な振舞をしたところ城門を守っていた石像が立上って彼ら二人を打倒し死に到らしめた。

（この場合、石で彫刻んだ石像が立上って人を打ち倒すというようなことはあり得ない。非常に力の強い石像に似た番人を指すものと思われる。）この事後、宮廷の内外共に恐れおののき、この篡奪王に敬意を払うようになった。即ち 第38代タウン・タデー王（Taung Thugyi: Min:）である。（U Min Han, U Hpo Kya その他のビルマ史にもこの記録がのっている）

#### 当時の宗教状態

古代より土俗宗教であったナツ信仰、及び竜神崇拜や仏教等が行われていたが、このタウン・タデー王の時代はナツや竜神信仰が栄え、仏教が衰えた時代であった。従ってアリー（Ari:）僧侶がはびこり、多くの害悪を為していたので、仏教は正義を示すことができなかった。タウン・タデー王は自分の胡瓜畑を大切にする余り、広大なりっぱな庭園を造り、そこに奇妙な大竜神像

を建てて、これを礼拝した。そればかりでなくアリー僧たちと相談して五つの塔を造りその中にナツ像とも云えないし仏像とも云えないようなものを彫って、朝晩これに食物や酒を供えて礼拝したと云われている。このようにナツ、竜神、アリー等がはびこって仏教はかすかな余命を保っていた時代であった。

アリーについて

「アリー」とは宗教的概念からみれば「左道密教」のことであって、インドで発生した密教のうち、方便と智慧との結合を男女の性交と同一視し、肉欲の満足をも以て法悦とする一派が現われたが、これを「左道密教」という。パガン時代のアリーたちが、初夜権 (Pan: ū: hlot) をもっていて、結婚式を挙げた花嫁は第一夜をアリーの僧院で過ごさねばならなかったということは、蒙古のラマ教と類似しているが、ビルマのアリーは仏教とベンガル地方のタントラ教との混合による一種の「左道密教」であったことが、容易に推測できる。なおアリー教については「大乘仏教とヒンズー教との混合形態」とする説 (U Ba Hpe) と「小乗仏教とヒンズー、娑羅門教、特にヴァイシュナ派との混合宗教」とする説 (G. H. Luce) がある。

アリーたちはまた彼らの教義を文に書き表わして、人に知られぬように樹の皮の中に隠しておき「神託により」(Einmet aya) と云って、樹の表皮から書きつけた文をとり出させて、人々にそれを信じさせ、自分の欲することをすべて実行した。実にアリーは仏教の破壊者であり、偽善者であって、暗青色の僧衣を身にまとい、頭髮は弁髪にして、ナツ、竜神、呪文、曼陀羅、秘薬、錬金術等を行っていた。何か悪い事をすれば、これこれの祈禱をくり返して誦え、またこれこれの供養礼拝するならば、その罪は消滅するという偽りの教えを説いた。

しかし、その後アノーヤタが王位に即くに及んでアリーたちはパガンより追放され邪教は衰滅して行った。アリーは現在でも シャン州 の一地方及び ワー州 にも残存していてパガン時代の風習を守り続けていることが最近の Shu mawa (ビルマ発行の雑誌) に書かれていた。

#### 第39代 クンソー・チャウンピュー王 (Kunhsaw-Kyaung: Hpyū)

前に述べたサレー・ンガコエに謀殺されたタンネ王の子で後にタウンタデー王の側近となり、税金催促係官として王に任えていたクンソー・チャウンピューは邪教を奉ずるタウンタデー王を追放して篡立した。それはビルマ暦326年 (A. D. 946年) であったが、タウンタデーの二子を助命して宮廷で育てた。二人は成人後一つの寺院を建て、その落成供養にクンソー・チャウンピュー王の來駕を求めた。クンソー王が寺院に到着するや直ちに彼をそこに閉じ込め、無理矢理に僧侶にせしめてその寺院に住まわせて彼らは王位を奪った。兄のチーゾ (Kyī: Zo) が即位したが、間もなく死んで、弟のソッカテー (Sokkatē:) が国を治めていたが、ビルマ暦406年 (A. D. 1044年) クンソー・チャウンピューの子アノーヤターはソッカテーに「異母弟」呼ばわりさ

れたことに立腹して、彼に一騎打を挑み、パガンに近いミェンカバにおいてソッカターを倒して王位に即いた。ビルマ史がより確実になるのはこの頃よりである。

#### 第42代アノーヤター王 (Anawyahtā Min:)

パガン王朝55代の内、今や42代目、即ちビルマ暦406年 (A. D. 1044年) に達した。この時こそビルマ国が初めて大躍進を遂げ、言語、民族、文学、宗教、経済、政治等種々な面で特に注意を払うべき発展の基盤となった時代である。

アノーヤターはソッカターを倒して、父のクンソー・チャウピーに復位を求めたがクンソーは辞退して、その後も僧院生活を送った。アノーヤターは王位に即いてからも、義兄ソツカターを殺した罪を悔い、その償いをなそうとして、仏塔、寺院、窟堂、宿坊 (Zayat といって、旅行者又は巡礼者のための無料宿泊所) 人造池、堰提運河等を造って人々のために功德を施した。

アノーヤター王の領土はパガン王朝の最後までで歴代諸王が直轄領として威令を行った地域であって、南北約200マイル、東西約80マイル、大体モゴウ、マンダレー、メテイラ、ミンヂヤン、チャウセ、ヤメデイン、マグエ、サガイン等イラワヂ河東岸の諸地方とパコックとミンブー両地方のイラワヂ西岸の流域地帯にまで広がっていた。その北には南詔があり南にはシヤン高原があり、南と西にはピュー族が住み、南部にはモン族がいた。

アノーヤターの時代には豪勇相ついで現われ、王の近侍として仕えた。先づ王とウエタリー (Wethali, 恐らくアラカン) よりきたピンサカリヤーニ (Pinsa Kalyani) 王妃との間に生まれたチャンズイツタ王子、ニヤウンウ 出身で水泳の達人であるニヤウン・ウーピー (Nyaung-ū hpi:), ミンム出身で棕櫚の木登りを業としていたンガトウエユー (Nga-htwe-yū:), ポツパー出身で百頭近い牛を一人で追っていたといわれるンガロンレツベ (Ngalon: -let-hpe) の四人と、回教徒のインド人で航行中船が難破してタトンへ漂着した時瑜伽行者の肉を喰って超人になり、そのためタトンのマヌハ王 (Manuha Min:) に恐れられ、彼によって迫害を受けたためパガンに逃亡してきた駿足を以てきこえたピヤツタ (Byatta), また彼の隠し子でシュエピンヂ (Shwe-hpin: -gyi:), シュエピンゲ (Shwe-hpin: -nge) の兄弟等がアノーヤター王の配下にいた。

最後のシュエピンヂ、シュエピンゲ兄弟は後にアノーヤター王のために多くの手柄を立てたにも拘らず、少しの義務を怠ったために王に処刑された。後に王は彼ら二人の霊を慰めるためにタウンビヨン地区に彼が建立したスタウンピパゴダ (Su Taung: pyi Hpayā:) の近くにシュエピン兄弟のナツ社を建て、盛大な祭りを行わせた。ポツパー山のナツ兄妹とこのタウンビヨンのナツ兄弟は非常に年代が古く、ビルマにおけるナツ信仰の問題に大きく取扱われている。

#### 仏教の興隆

ビルマにおいては土俗宗教である精霊崇拜、竜神信仰等がその頃まで存在していたが、その内



第38代タウンタデー王の時代に述べた如く、仏教は不純で、勢力も乏しく、特に竜神やアリが時の流れに乗って盛んになっていた。今やアノーヤターの時代においては、ナツ崇拜、竜崇拜およびアリーたちの勢力が弱まりつつあった。その頃、タトン(Thaton)からシン・アラハン(Shin Arahān)というモン族の僧侶が仏法を弘めんことを願ってパガンへ来て、アノーヤター王に仏教の純粋な正しい教義を説いた。王は信仰篤い人であったので、シン・アラハンの説教に熱心に耳を傾けた。その清浄と謙虚とはアリー僧侶たちの曲学阿世振りと全く対蹠していることを王は知った。シン・アラハンは小乗仏教の諸部派中南インドおよびセイロンにおいて最も勢力があり、戒律主義の正統派である南伝上座部(Theravada)に属していた。現にセイロン、ビルマ、タイ、カンボジア、ラオス等に行わるる仏教はすべてこの系統に属し、パーリー語一切経を伝えるものである。

### タトン攻略

シン・アラハンの話しによって、アノーヤター王はタトンに多くの仏教経典があることを知り、貢物としてそれらを要請したが、タトン王マヌハは侮蔑の言葉を以て拒絶した。アノーヤター王は大いに怒り、大軍を進めてタトンを攻撃した。チャンズイツタやビヤツタをはじめ多くの勇士の活躍によってアノーヤターの勝利となった。タトンの町は完全に破壊され、遺物、像、および経典はマヌハの52頭の白象に積まれ、パガンへ運び去られた。またマヌハおよび彼の家族、そして多くの学者、技工等もパガンへ連れ去られた。このようにしてタトン攻略は終わった。それはビルマ暦419年(A. D. 1057年)であった。ビルマ文化史上最も記念すべき出来事である。

パガンへ連れ去られたマヌハ王はミエンカバーにて丁重に軟禁された。彼は自分の持物を売り払って仏塔を建てた。今でもマヌハ・パゴダとして残っている。その後アノーヤターはマヌハ王と彼の家族たちをシュエジゴン・パゴダの pagoda slave (hpayā: kywun)として生涯を送らせた。シュウエイヨーの「ビルマ民族誌」ではマヌハ王および彼の王妃、王子、王女たちがビルマで仏塔奴隷にされた最初の人々であるように述べられている。その後も戦争の俘虜や死刑にしては都合の悪い者を仏塔奴隷とした。それは昔、ヨーロツパその他で扱っていた奴隷とは全く異ったものであって、迫害されることなく、子々孫々パゴダに住み、パゴダの掃除や世話をする仕事に従事するのである。

タトンから仏教経典がパガンへもたらされて以来、アリーの教義は衰え、仏教が純化され発展して行った。ビルマ文字がその時初めて書き表わされるようになった。この文字はインドの南部から下ビルマのモン族の手に西暦500年頃に伝えられたパラワ文字の系統である。またタトンから大勢の学者、技術工たちが来たので文学、美術特に石造や鍛冶の技術も大いに進歩した。

### アノーヤター王の遠征

アノーヤター王は信仰に熱心のあまり、アラカン国にあるマハムニ(釈尊)像を手に入れるべく

アン峠を通過して北部アラカンに軍を進めアラカン王子を屈服させたが、マハムニ像は運び去ることができなかった。恐らく山々を越えて運ばねばならぬだけの人員を缺いていたためであろう。その代りにその祠堂の金銀の聖器をパガンに持ち帰った。

王はまた仏歯をも欲したが、ペルシヤの大使によって南詔国へ持ち去られていたので王はチャンズイツタを先頭として雲南へ大軍を進めたが、南詔の長ウーテボア (Ü: Te-hpwā:) は城門を鎖したので、アノーヤターは城外を囲んだ。かくて久しく対峙の後、二人は互いに進物を交換して和を講じた。アノーヤターは仏歯を得られなかったが、その代り、その仏歯に触れていたといわれるひすいの像を贈られ、それに満足せねばならなかった。

王は途中シヤン州に立寄った際、モーガウン Mō: gaung:) の土候 (Sawbwā:) は王女ソーモンフラを王に献じた。後にソーモンフラが彼女の耳環に刻まれていた仏陀の像を見つめて想像にふけているのを彼女を嫉妬していた他の王妃や後宮たちが見て、ソーモンフラが魔女であると王に告げたため、彼女は追放され、今のマンドレーの東南にシュエ・ザーヤン・パゴダ Shwe Zāyan Zedī) を建立して耳環の仏像を祀り、アノーヤター王の妃として伝奇的な生涯を送った。その物語は今日なお舞台上に上演されている。

ラオ・シヤン族がペグーを侵したので、ペグーはアノーヤターに救いを求めた。王はチャンズイツタに小数の秀れたインド兵をあたえて、ラオ・シヤンを潰走せしめた。その後チャンズイツタはタライン族の間で英雄としてあがめられた。帰国に際し、アノーヤター王への贈物として四本の仏髪、その他の宝物に加えて、キン・ウ姫 (またはマニヤサンダ Manisandā 姫) がパガンへ送られた。帰国後、チャンズイツタは王にキン・ウ姫との仲を疑われ、パガンを去った。その後のチャンズイツタの物語は演劇の好題目となっている。

#### シュエジゴン・パゴダ (Shwezigon Zedidaw)

ビルマの国ではアノーヤター王以後、壮麗なパゴダや窟堂が数多く建立された。歴代諸王は自分自身のために宮殿や墓場の建築物を大規模に造る代りに専ら仏教信仰のためにパゴダの建立を競った。しかし、このパゴダの建立は信仰のためのみでなく、記念用石柱に碑文を刻してその時代の出来事を記録するためのものであった。例えば、シュエザーヤン・パゴダを礼拝することによって哀れなソーモンフラの身の上を思い浮べ後世の人々にもそれを偲ばせることができた。

アノーヤター王の建立したパゴダの中で最も重要なものはシュエジゴンであるが、それはビルマ暦421年 (A. D. 1059年) に起工され、タレケツタラにてドツタバウン王によって建てられたパゴダを取壊して、そこに安置されてあった釈尊の前額骨と、セイロン渡来の仏歯をシュエジゴン・パゴダに祀った。アノーヤター王の存命中にはここまでしか竣工するに至らなかった。第44代チャンジツタ王 (Kyanzithā:) (ビルマ暦446年～474年, A. D. 1084年～1112年) の時代に

至ってもその造営が続けられ遂に完成された。

G. E. Harvey のビルマ史にはシュエジゴンの敷地が定められた方法が次の如く書かれている。「宝石を鑲めた宝篋塔の中に仏歯を収め、これを一頭の白象の背に載せて、象を徘徊させて、象の休息した場所を敷地と定めた」ミンヂヤン地方のトウユウイン山パゴダとローカナンダ、パコック地方のタンチ山パゴダ、チャウセ地方のピエツカユエ・パゴダなどの敷地もまた同じ方法によって定められたものである。以上のパゴダにはセイロンから送られた仏歯より分成された舍利を祀ったものであると言われている。ペグーから送られた仏髪を祀るためアノーヤター王はパガンの南にシュエサンドー・パゴダを建立し、さらに遠くメテイラ地方にはシュエインミョー・パゴダ、シュエグーデー・パゴダ、シュエジゴン（同名であるが別のパゴダ）等を建立した。

アノーヤター王はビルマ史上、初めて全国の統一に成功した王であつて、タウングー王朝のタビンシュエティ（Tabinshwehti: ビルマ暦892年～912年, A. D. 1530年～1550年）、コンバウン王朝のアラウン・パヤー（Alaung: hpayā: ビルマ暦1114年～1122年, A. D. 1752年～1760年）と並んでビルマの三大英傑と称されている。その成功の要因は勿論、ビルマ民族の興隆及びビルマ文化の発展に負うところが大きい、それと同時に南伝小乗仏教を新たに採り入れて国民の精神的支柱としたことも見逃がすことはできない。古来、世界史上、国家の統一、王権の維持強化のために宗教が利用されてきたことは枚挙に暇がない位である。

例えば、インドではチャンドラ・グプタの創始したマウリア王朝の維持には仏教が寄与している。特に、アショカ王は彼自身熱心な仏教徒であった。また16世紀初期、北インドに樹立されたムガル帝国の第三代国王アクバル大帝は超国家的傾向の強いイスラム教を根幹とし、ヒンズー教その他の固有信仰を融合して、自らその教祖の地位について国内の秩序を維持した。一方、マホメットが興したイスラム教を中心に発展を遂げた国にサラセン帝国があり、これを築き上げたのは初代正統カリフのアブー・バクルである。イラン高原にペルシア民族が樹てたササン王朝ではペルシア民族の間で昔から信仰されいたゾロアスター教を国教としている。これらの国はその後、何れも滅亡したが、住民は依然としてその宗教を固執している。イスラム教を中心とする国は最近でもアラブ連合、イラク、アフガニスタン、パキスタン等に見られるが、王権との連携はヨルダン（ハシムITE王家のフセイン国王）、イラン（パーレビ国王）、数年前にクーデターで倒れたが、イラク（フアイザル国王とイラー皇太子）等にその姿を留めている。また共和国になったとはいえ、イスラム教徒の熱狂的な崇拜を受けていたアリ・カーン（パキスタン）はその変形と考えることができる。王権と回教教祖が一体となっている例としてはサウジ・アラビア王国（イブン・サウド王）クウェイト土候国、マスカット・オーマン土候国等があり、9入のサルタンの

統合制によるマラヤ連邦もその中に含めてよい。ユダヤ教を中心とする国にはヘブライ民族の建国になるイスラエルがある。古来「流浪の民」「亡国の民」として世界中で迫害を蒙った悲劇の主人公、ユダヤ民族はあくまでその絶対的一神教エホバの神の信仰を棄てず、遂にパレスチナ戦争を経て、1950年に至ってイスラエル共和国の地位が確立した。ムガル帝国の崩壊後、長期間、英国の植民地であったインドは第二次世界大戦後、独立を得たが、ヒンズー教は今日でも依然として根強い。

このように国家設立の基盤としての宗教の果す役割は絶大なものがある。アノーヤター王がビルマ国家の土台に仏教を利用したことは当時としては誠に果敢な改革だったといえよう。

#### 参 考 文 献

- U Hpo Kya : Myanma Yāzawin Akyin: 1937  
U Min Han : Myanma Naingngandaw Hket laik Yāzawin 1937  
U Pe Maung Tin : Myanma Sāpe Thamaing : ビルマ暦 1317 A. D. 1955  
G. E. Harvey : Outline of Burmese History, 1947  
シュウエイヨー：ビルマ民族誌。  
三上次男 }  
尾鍋輝彦 } : 世界史資料集  
小西四郎 }  
関根正男：イスラエル宗教文化史  
蒲生礼一：イスラム  
U On Maung : Myanma Yāzawin Thit, 1953  
C. C. Lowis : The tribes of Burma, 1949  
W. W. Hunter : A Brief History of the Indian Peoples.  
Naingngandaw-Pya-taik : Myanma Naingngan-daw-shi-Aikhhayā Thamaing